

# 絵本や紙芝居に見るヤングケアラーの問題

—— 子供の人権について ——

林 伸 一

## 1. はじめに

2023年7月11日付で「山口の朗読屋さん」の代表を務めている筆者宛に下松市笠戸公民館の廣中作次館長より「笠戸本浦地区人権教育活動講演会講師について」の講師依頼状が届いた。

山口県下松市の笠戸公民館で笠戸本浦地区の「人権教育活動講演会」を9月29日に開催するにあたっての講師依頼と講座名を知らせるよりの依頼であった。早速「ヤングケアラーの問題—子供の人権について—」という演題案を提案した。

講師依頼をいただいたのは、筆者が山口県教育カウンセラー協会の会長を務めており、防府のYIC看護福祉専門学校と小郡の吉南准看護学院で「人間関係論」という科目を非常勤講師として担当していて、その中で「ヤングケアラーの問題」を扱っているためであると思われた。

専門学校の授業でも一方的な講義で「ヤングケアラーの問題」を扱ってもあまり関心を持ってもらえないので、毎年、絵本や紙芝居の中に見られる「ヤングケアラーの問題」を探してみる試みを行っていた。そこで笠戸本浦地区の「人権教育活動講演会」でも同様の方式で講演することにした。

以下に専門学校での講義と受講生の反応、講演会の内容を開示し、問題点を洗い出したい。



◀左から「山口の朗読屋さん」のメンバー  
岡村久美子  
島田令子  
金崎清子  
林伸一

## 2. ヤングケアラーとは

ヤングケアラーについては、渋谷智子（2018）『ヤングケアラー—介護を担う子ども・若者の現実—』（中公新書）の中で、次のように記されている。

「ヤングケアラーとは、家族にケアを要する人がいるために、家事や家族の世話をしている、18歳未満の子どものことである」。

「18歳未満の子ども」というと「高校生」を「子ども」扱いにするのかと反発があるかもしれない。渋谷（2018）は、「18歳以上～30代ぐらいまでのケアラーを『若者ケアラー』と区別する」としている。

「ヤングケアラー」と「若者ケアラー」を区別したとしても、英語にすれば<young carer>となり、区別がつかないだろう。しかし、「ヤングケアラー」が年月を重ね「若者ケアラー」になる場合もあるだろうし、さらに年月を重ね「ビジネスケアラー」となる場合もあるだろう。（注1）

ヤングケアラーは本来大人が担うべき、以下のようなケアを行っている。

- ・ 障害や要介護などを抱える家族の入浴や介助をする
- ・ 病気で働けない親の代わりに労働を行う
- ・ 家族に代わって幼いきょうだいの世話をする

ケアが必要な家族がおり、介護できる大人がいない場合、子どもがその役割を担わざるを得ない。

子どもが家族をケアすること自体は問題ではないが、子どもとして守られるべき権利が侵害されているケースもあり支援が必要である。

文部科学省と厚生労働省が令和3年3月に公表した「ヤングケアラーの実態に関する調査結果」によれば、中学2年生の約17人に1人がヤングケアラーであることが判明した。



図1. ヤングケアラーとは

しかし、自分自身がヤングケアラーであると自覚している子どもは、わずか2%に過ぎない。中学2年生のうち、12.5%は自分がヤングケアラーであるかどうかわからない状況でケアを行っていることが判明した。そこで、前ページ図1のような解説図が、自治体のパンフレットなどで使用されている。

前ページの文章記述よりは、図1による説明の方が、より具体的に内容理解ができる。

渋谷（2018）の問題提起を受けて、次のようなさらに新しく詳細な著作物が、刊行されている。

2021年 毎日新聞取材班著『ヤングケアラー・介護する子どもたち』毎日新聞出版

2022年 村上靖彦著『「ヤングケアラー」とは誰か・家族を“気づかう”子どもたちの孤立』朝日新聞出版

2023年 結城康博・米村美奈・黒川雅子著『自治体×福祉機関×教育機関×地域・ヤングケアラー支援者の役割と連携』ぎょうせい

また、2022年6月に「こども家庭庁設置法」と「こども基本法」が成立し、2023年4月1日にこども家庭庁が発足している。以来、ヤングケアラーの問題は、こども家庭庁が管轄している。

上記の出版物には、それぞれに調査データや事例が紹介されているが、ここでは、実際の事例ではなく、絵本や紙芝居の中の該当場面を探して、検討することにした。子どもや学生にとっては、図1よりもさらに身近に問題にアプローチすることが可能になると判断したためである。

### 3. 『父さんがかえる日まで』

モーリス・センダック（Maurice Sendak, 1928-2012）は、アメリカ合衆国の絵本作家である。『かいじゅうたちのいるところ』（Where the Wild Things Are）は、1963年出版。世界中で約2000万部売れている。その他80冊を超える作品を発表し、現代絵本界を代表する存在とされている。

モーリス・センダックは、次のような作品で受賞している。

1952年 『あなはほるもの おっこちるところ』：ニューヨーク・タイムズ年間最優秀図書に選定

1964年 『かいじゅうたちのいるところ』：コールデコット賞受賞

1970年 「国際アンデルセン賞画家賞」受賞

1982年 『OUTSIDE OVER THERE』：第33回全米図書賞（児童文学部門）受賞

（『ウィキペディア』参照）



モーリス・センダックの英語の絵本『OUTSIDE OVER THERE』は、『まどそのそのまたむこう』というタイトルで協明子訳が1983年に福音館書店から発行された。その後、アーサー・ビナードが、2019年に『父さんがかえる日まで』（偕成社）というタイトルで日本語に翻訳している。（詳しくは、林2021参照）

同書の中で主人公のアイダが、ほんの一瞬赤ん坊の妹から目をはなしたすきに、赤ん坊がゴブリン（醜く不快な妖精）に誘拐され、死に至ることも心配される危機に陥った。本来、赤ん坊が誘拐されたとなると母親が真っ先に探しに行くところだろうが、母親は航海に出た父親のことを考えて、呆然と海を眺めているばかりである。母親の育児ノイローゼ、育児放棄、またはネグレクトさえ疑われる状態かもしれない。

また、同書に一切姿を現さない父親は、母親と主人公の少女アイダに育児と家事を任せて航海に出て、いつ帰るかもわからない船乗りの仕事をしている。

「男は外で仕事、女は内で家事と育児」という性別役割分業（gender division of labor）の固定化をまさに絵に描いたような本となっている。

作者のセンダックも親が不在の家庭で育った。「両親がどちらも仕事に追われていて時間がなかったため、私は否応なしに姉に押しつけられてしまった」と述懐している。

また、『父さんがかえる日まで』では、主人公のアイダが最初から最後まで裸足で登場する。まだ歩けない赤ん坊の妹が裸足であるのは、自然だとしても、妹の面倒を見ている姉が裸足なのは「子どもの貧困」を考えさせられる。

渋谷（2018）も「発展途上国の栄養失調の子どもたちに比べれば、日本の貧しい家庭の子どもたちは、一日に一回以上は食事ができて、学校にも通え、靴も持っているかもしれない」（p.3）としている。今でも世界を見渡せば、靴を持っておらず、裸足で生活している子どもたちがいるわけで、主人公のアイダも、その一人なのかもしれない。

アイダは、ホルンを持っていたり、番犬を飼っていたり、家具や調度品が立派に見えることから、裕福な家庭で生活しているようにも見える。しかし、アイダは学校に通っているのか、読み書きは教えられているのかは、不明である。最終場面で、父親からの手紙を読んでいるから、アイダは文字は読めるらしい。

しかし、その手紙には、「アイダよ、あかんぼうのせわをして、母さんのこともだいいじにね。しっかりたのんだよ、父さんがかえる日まで」と書かれていた。もちろん

ん、アイダはしっかりやっているのだが、実質的に一人親家庭と言ってもいい状況下で、母と妹の世話までも担わされている。この物語で、アイダは、ヤングケアラーの役割を負わされているといってもいいであろう。

#### 4. 『父さんが帰る日まで』に対する看護学生からの反応（2023年）

- \* 『父さんが帰る日まで』という絵本は、何が伝えたかったのかなと考えましたが、なかなか難しかったです。ヤングケアラーのことなのかな。（35歳・女性）
- \* 『父さんが帰る日まで』の本が、とても印象的だった。子供のころだったら、何も思わず読んでいた本も大人になるといろいろな疑問が浮かんでくる。もっとたくさん本を読みたいと思う。（36歳・女性）
- \* 『父さんが帰る日まで』：父さん早く帰ってきてあげて～。（47歳・女性）
- \* 『父さんが帰る日まで』という絵本が、まず絵が印象的だった。ゴブリンみたいなものが、実際にいたら、少し怖いなと思った。（26歳・女性）
- \* ヤングケアラーの問題について考えさせられた。昔の絵本や（昔から）現実でも子どもの労働、世話、家事などがあったのだと気づかされた。子どもなのにかわいそうだと感じた。どうすることもできないのかと考えさせられた。（35歳・女性）
- \* 私の周りにヤングケアラーっぽい人はいなかったのですが、意識したことがなかったが、世の中には、たくさんいるんだなと思った。そういう人達がいることを忘れないでおこうと思います。（19歳・女性）
- \* 中学生のころ、下の弟や妹のめんどうを見ていたのが、ヤングケアラーだとは思わなかった。下の兄弟のめんどうを見るのが当たり前だと思っていたから。でも過去を振り返っても、それが苦だとは思わない。それは、それでよかったから。  
(28歳・女性)

上記のように「中学生のころ、下の弟や妹のめんどうを見ていた（28歳・女性）」自分を「ヤングケアラーだとは思わなかった」というケースもある。「下のきょうだいのめんどうを見るのが当たり前だ」と家族内で教育されてきたのであろうし、世間的にも「よく弟や妹のめんどうをみるいい子だね」と褒められていたのであろう。自分の過去を振り返っても、「それが苦だとは思わない。それは、それでよかった」と自己肯定的な認識がある。人懐っこい性格の持ち主でもあるように見受けられた。

渋谷（2018）も「イギリスでは、子どもや若者がケアの経験を通して得たプラスの影響にも目が向けられている」として、次の表1に示すような利点をあげている。それぞれ番号を付けて、箇条書きにして、次の表1にまとめてみた。

表1. 子どもや若者がケアの経験を通して得たプラスの影響 渋谷 (2018) より

|                       |
|-----------------------|
| ①年齢の割に高い生活能力を身に付ていること |
| ②マルチタスクをこなせること        |
| ③聞き上手であること            |
| ④忍耐強いこと               |
| ⑤病気や障がいについての理解が深いこと   |
| ⑥思いやりがあることなど          |

表1の②「マルチタスクをこなせること」というのは、ヤングケアラーが買い物、料理、掃除、洗濯、介護、きょうだいの世話など多岐に渡る仕事を一定の時間帯にこなせることを指している。

上記のほかにも利点はあるだろう。ヤングケアラーを「子どもなのにかわいそうだと感じた。どうすることもできないのかと考えさせられた。(35歳・女性)」と負の側面に焦点化されてしまいがちで、児童虐待の文脈で語られることが多い。

しかし、上の表1のようなヤングケアラーのプラスの側面を生かした将来展望を考えてみることも可能であろう。「子どもなのにかわいそうだと感じるのは、子どもなのに不遇の状態にあると判断することである。

たとえ不遇の状態であったとしても「不遇のときこそチャンスするとき」(国分、1992)と考えて、「自分をコミットするものがあるとき、人は精神が高揚し、人の信頼も維持できるのである。不遇のときとは、実力養成のときである」(国分、1992)と考え直すこともできるであろう。

逆に考えると家族関係や経済的に恵まれていているとそこに「いつまでも安住していたくなる。それゆえ、自分の能力を多角的に使ってみるという危機場面に恵まれないう不利がある」(国分、1995)状態に置かれるという場合もある。

表1の6点のどれもが、医師や看護師、介護士、ケースワーカー、カウンセラーなど援助職(ケア職)に向いている特性である。こういった援助職(ケア職)にある人が、人間嫌いだったり、人見知りしたり、人間関係をとるのが苦手というのでは、仕事にならないことがある。

## 5. 『花さき山』

斎藤隆介・作／滝平二郎・絵の『花さき山』は、1969年に岩崎書店から発行され、120万部を超えるロングセラーの絵本である。半世紀を超えて売れ続けているのは、児童福祉文化奨励賞やブックデザイン賞を受賞し、日本子どもの本研究会選定図書や



全国学校図書館協議会選定図書になっているからという理由もあるだろうが、それより多くの人の心をつつ物語の内容と絵の力によるものであろう。

1969年出版当時の編集長の小西正保氏は、『絵本と画家との出会い』の中で「全体が純黒の背景の中で、切り出された登場人物たちが鮮やかに浮かび上る。さらに鮮やかさを添えるのはその白と黒の鋭いきりえの中にほどこされた赤、青、黄、緑などの色彩の美しさだ」と述べている。きりえの黒い紙色を生かして、黒バックの装幀デザインを決めたところ、社長の岩崎徹太から、「子どもの絵本に黒はよくないから、バックの色を変えなさい」と指示された。小西は「はい、変えます」と答えたものの、滝平二郎のきりえの美しさを生かすには、やはり黒しかないと思い定め、黒い表紙のまま印刷して出版してしまった。(1969年12月30日)



当時、子どものための話には、向日性が求められ、明るい色彩が好まれていたため、「黒い表紙の絵本」は、小さな物議をかもしたが、幸いにしてこの絵本は、そのタブーをうち破る作品となり、翌年(1970年)から始まった講談社出版文化賞の「第1回ブックデザイン賞」を受賞した。(岩崎書店『花さき山』50周年/「絵本『花さき山』が出来るまで」<https://www.iwasakishoten.co.jp/special/hanasaki>参照)

[iwasakishoten.co.jp/special/hanasaki](https://www.iwasakishoten.co.jp/special/hanasaki)参照)

「黒い表紙の絵本」が、白地の中表紙のような装幀になっていたかもしれない。

斎藤隆介/文・滝平二郎/絵の『花さき山』がアーサー・ビナードの英訳で『Heartbloom Hill』(2020、岩崎書店)というタイトルで出版された。(林2022参照)

貧しい村の娘あやが山菜取りに山に入って、道に迷い、気づくと一面に花が咲いている。山姥が言うには、あやが晴れ着を我慢して、妹のために譲る、良い行いで森に一輪の花が咲いたという訳だ。そこに広がる花はそれぞれ、村人のがまんや良い行いの証なのだという。

『花さき山』は、2019年1月18日のNHKの「あさイチ」という番組で紹介されている。同番組のゲストとして元厚生労働省事務次官の村木厚子氏が出演し、「人は、何ももってなくても何かをすることができる。そうして咲いた『花さき山』の花は、その人自身を励まし、強くする」と冤罪で164日間の拘留中に支えになった本として推奨している。

厚生労働省を退職後、村木厚子氏は、若い女性への支援活動に携わり、女性の労働について同番組でも語った。『花さき山』の中の主人公あやは妹のために新しい着物

を諦めたり、一人で山に山菜採りに出かけたりと「子どもの貧困」とヤングケアラーの問題を抱えているように見えるが、その点について村木氏はどのように考えているのであろうか。

ヤングケアラーとは、家族の介護やケア、身の回りの世話を担う子どものことである。小学校の光村図書の道徳の教科書にも『花さき山』がとりあげられているが、妹思いで家業を手伝う美談の教材として扱っていくことが果たしていいのだろうかという疑問が残る。



かつては、左の絵のように赤ちゃんを負って学校にやっ来て、授業を受けていた生徒もいた。当時は、保育所も幼稚園もなかったために、学校側も容認せざるを得なかったのであろう。

洪谷（2018）も「年輩の方々のなかには、子どもや若者が家族のケアをするのは良いことだと考える人もいるだろう。家族が助け合って世話し合うのは当たり前という感覚もあるかと思う。確かに、子どもや若者が家族の世話をすることは、昔から存在していた」（p.1）としている。

確かに子だくさんの大家族時代には、三世同居も珍しくなく、年長者が幼い子どものめんどうをみる、兄や姉が弟や妹の世話をすることが「当たり前という感覚」もあった。

それが核家族化が進み、一人っ子家庭や一人親家庭が珍しくなるとヤングケアラーの立場の子どもへの負担が増大することとなった。

「子どもの貧困」に起因して海外ではゲリラ組織の少年兵にさせられることが問題視されている。

日本でも「子ども食堂」などの対策は試みられているが、月に一回程度の開催では、焼け石に水状態で、現実的な解決には、ほど遠い状態にある。フードバンクなどの取り組みもみられるが、子供の学習や進学の問題などへの支援は、とても十分とは言えない。

## 6. 『モチモチの木』

斎藤隆介と滝平二郎の『モチモチの木』は、1971年に岩崎書店から発行された。小学校教科書にも長く広く採用されており、2020年度の全ての小学校3年生の教科書に掲載されている。

2007年には『The Tree of Courage』というタイトルで、サコ・ラクラン 訳で、R.I.C.



Story Chestから英訳が出版された。

2021年には、岩崎書店から『The Booyoo Tree』というタイトルでアーサー・ビナードによる英訳が出版された。

あらすじは、峠の猟師小屋に祖父と住む豆太は小心者で、夜は祖父を起こしてついて来てもらわないと外にあった別棟の便所に行けないほどであった。家のある豆太が「モチモチの木」と名づけたトチの木が怖いのだった。ただし昼は全く怖がらない。

そんなある晩、祖父は腹痛で苦しみだす。祖父を助けるには暗闇の中、モチモチの木の前を通り、半里（約2km）も離れた麓（ふもと）の村まで医者を呼びに行かなければならなかった。

豆太は勇気を振り絞り医者を呼びに行き、祖父は助かった。なんとその時、モチモチの木は月を背にして輝いていた。祖父の話していた、亡き父も見たという<霜月二十日の丑三つ時にある、勇気のある者だけが見る事の出来る「山の神の祭り」>とはこのことだったのだ。

祖父は豆太に「自分で自分を弱虫だなんて思うな。人間、優しささえあれば、やらなきゃならねえ事は、きっとやるもんだ。それを見て他人が驚くわけさ」と述べる。しかし、祖父の病気が治ると豆太はまた元の小心者に戻り、祖父を起こさないと便所に行けないのであった。



『モチモチの木』には、紙芝居版もある。斎藤隆介が原作という点は同じだが、紙芝居の絵は、諸橋精光で脚本も担当している。鈴木出版より、32場面で2001年に発行されている。豆太が戸を蹴破るようにして飛び出していく場面は、絵本版よりも迫力がある。

いずれにしても、『モチモチの木』は、豆太と同じ5歳の子どもにとっては、とても怖い作品だとされている。

物語のその後の豆太は、語られていないが、祖父一人孫一人の生活が思いやられる。物語の中の祖父の病気は、短期間に治ったようだが、もし治らずに寝た切りになったとしたら、その介護をするのは、豆太の役割となるだろう。学齢に達したとしても、山を下って麓の学校に通うのも大変である。祖父の介護をしながら、通学することは、果たして可能であろうか。

本当に怖いのは「モチモチの木」ではなく、「モチモチの木」の物語の「その後」であろう。

## 7. 周囲のヤングケアラーに対する認知（看護福祉専門学校生の場合、2023年）

- \* ヤングケアラーが思ったより多いことを知り、自分の周りにもヤングケアラーの子がいた可能性があるかもしれないと身近に思った。（18歳・女性 a）
- \* ヤングケアラーの話をしているときに、どこまでが手伝いで、どこからがヤングケアラーなのか、判断しにくいと思った。（18歳・女性 b）
- \* ヤングケアラーは、高校の時に軽く習ったので、理解しやすかった。これから増えていかないようになってほしいと思った。（18歳・女性 c）
- \* ヤングケアラーが、どんな子供なのか、知ることができたので良かったです。（18歳・女性 d）

上記の「自分の周りにもヤングケアラーの子がいた可能性があるかもしれないと身近に思った。（18歳・女性 a）」との気づきは、重要である。表 1 の②に示したようにヤングケアラーの子どもたちは、「マルチタスクをこなせる」ことから、周りには知られずに学業と家事と介護をこなしていたかもしれないのである。何の部活動やサークル活動もしないで、授業が終わるとすぐに帰宅してしまう学生が「帰宅部」などからかわれていたが、その学生は急いで帰宅して、買い物や掃除、洗濯などの家事全般をまかされていたのかもしれないのである。部活動やサークル活動をしてから帰る学生の視覚外にヤングケアラーの子がいた可能性がある。

## 8. ヤングケアラーの自分時間（#METIME）（同上、看護福祉専門学校生の場合）

- \* ヤングケアラーをしていた子供達は、大人になってもちゃんと自立できるんだろうなと思った。でも自分の時間があまりないのは、かわいそうだと思った。（18歳・男性 e）
- \* ヤングケアラーについて、18歳未満の子どもが、どのように生活しているか、家族とどのように関わっているかを考えることが大切。中学生が数も多く、兄弟のケアが多く、自分の時間を使えないなど、いろいろ問題点があると知った。標語「考えて／僕の時間を／返してよ」（19歳・男性 f）

2023年11月15日のNHKあさイチで「#METIME “自分時間” について考えてみよう」という放送があった。METIME とは、忙しくしている人が自分の回復やリフレッシュのために自分のしたいことをする時間のことをいう。番組では、主婦やビジネスパーソンの「自分時間」がなかなか取れない人の例が示されたが、深刻なのは思春期真っ只中のヤングケアラーにとってMETIME「自分時間」が取れないという問題だろう。

家事や家族のケアに追われて、上記の標語「考えて／僕の時間を／返してよ」(19歳・男性f)と叫びたくなるヤングケアラーの若者がいることも忘れてはならないだろう。過労死ラインを超える長時間労働で、自殺してしまう若者が多い中で、自分の回復やリフレッシュのためのMETIME「自分時間」が、いかに大切かが分かる。

#### 9. ヤングケアラーと親の関係（同前、看護福祉専門学校生の場合）

- \*親は子どもの最も身近な教育者であり、息子や娘が一人前になるまで、しっかり責任を持つべきと思った。ヤングケアラーが問題になっている中、そのような子は学力にも影響すると思った。(18歳・男性g)
- \*私の友達は、ヤングケアラーで弟の子守も御飯も家事も全部まかされていました。私は、それを知りながら、友達には何もしてあげられず、悔しい思いをしていたことを覚えています。そのヤングケアラーの子は、親のことを毒親とも呼んでいました。親子関係が複雑なため、学校にもろくに通うことができず、高校にも行けず、今も家庭が大変そうで、すごく心が痛みます。私は、この世の中にあまり知られていないヤングケアラーをもっと知らせていかないと虐待で苦しんでいる子ばかりではないということを知らせるべきだと思った。(18歳・女性h)
- \*ヤングケアラーは、親が動かたくなくて、やらせているとしたら問題かもしれないと思いました。(28歳・女性i)

上記の「親は子どもの最も身近な教育者であり、息子や娘が一人前になるまで、しっかり責任を持つべき」(18歳・男性g)とする意見は正論である。しかし、親が病気だったり、ひとり親家庭だったりして、親が子育ての役割と義務と責任を十分には、果たせない場合もある。

また「ヤングケアラーの子は、親のことを毒親とも呼んでいました」(18歳・女性h)とある。「毒親」という言葉が独り歩きしているような感があるが、中野信子(2020)は、『毒親—毒親育ちのあなたと毒親になりたくないあなたへ—』の中で、次のように毒親を定義している。

「気づかれにくい虐待—心理的なネグレクトや、精神的な虐待、過度の干渉によって子を支配しようとするなど、まさに子どもの成長にとって『毒』となる振る舞いをする親のこと」(p.18)

また、中野(2020)は、毒親、というのは、「自分に悪影響を与え続けている親その人自身」というよりも、「自分の中にあるネガティブな親の存在」、といったほうが適切かもしれないと述べている。

## 10. ヤングケアラーへの対応の仕方（同前、看護福祉専門学校生の場合）

- \* 虐待やヤングケアラーは、今は自分は関係なくても、本当に身近なことだと思います。ヤングケアラーに関しても、実際にそういった人を目の前にすると何をしたら良いのか分からず、結局何もできないと思います。なので、今日の授業をきっかけに対応の方法などを調べてみようと思いました。（18歳・女性 j）
- \* ヤングケアラーで困っている人が、これから先にいたら、一人の人間としても、医療関係者としても、助けてあげたいと思った。（18歳・女性 k）

上記の「ヤングケアラーに関しても、実際にそういった人を目の前にすると何をしたら良いのか分からず、結局何もできない」（18歳・女性 j）というように、対応のしかたが、わからず無力感を感じる場合もあるだろう。その一方で「一人の人間としても、医療関係者としても、助けてあげたい」（18歳・女性 k）という積極的な姿勢も見られる。

## 11. 今後の課題

村上靖彦（2022）は、ヤングケアラーが家族を“気づかう”子どもたちで、その孤立を問題にしている。前述した「帰宅部」学生の場合、クラスや学校で孤立していて、悩みを聞いてくれる友人もいないという孤立無援の状態にあるとしたら、問題である。ヤングケアラーのことを“気づかう”仲間が必要なのである。

自治体としても、24時間態勢の相談窓口をつくるなどの対策をとっているところもあるが、身近な仲間や友人が悩みを聞いてくれるだけで、孤立感から救われる場合もある。学校に派遣されているスクール・カウンセラーも週一回だけの学校訪問体制では、なかなか相談のタイミングが合わないこともあるだろう。その場合、クラス担任や副担任、養護教諭が相談にのってもいいだろう。

友人の相談を受けるとどうしても解決策を示したくなるが、問題の根本原因が、親子関係などの家族関係にあったり、家計の問題であったり、「子どもの貧困」だけでなく「親の貧困」ひいては「日本の貧困」であるとしたら、個人の力ではいかんともしがたい。

2023年4月1日に発足した「こども家庭庁」が、有効なヤングケアラーの問題を解決する方策を練り上げて、広く国民に示して、具体策を実行に移してほしいものである。（注2）

(注1) ビジネスケアラーとは、仕事と介護を両立させようとしているビジネスパーソンのことである。40代後半～50代後半で一気に急増する傾向が見られるが、20代・30代にも1割弱いることが明らかとなっている。その実態と問題点は、2023年11月13日のNHKクローズアップ現代でも「仕事と介護に挟まれて ビジネスケアラー318万人時代の現実」として報じられている。

(注2) 山口県の場合、「山口県ヤングケアラー専門相談窓口」が(〒754-1277) 山口市阿知須1448番地(こども家庭支援センター清光内)に設置されている。そこは、山口県こども家庭課から委託を受けて運営されており、以下の電話とメールで、毎日24時間相談を受け付けている。

●専用電話は、0836-65-1177で、専用メールは、[yongcarer@s-seikouen.com](mailto:yongcarer@s-seikouen.com)

また、「山口市こども家庭センター」が(〒753-0079) 山口市糸米二丁目6番6号に設置されている。妊娠・出産・子育ての総合相談窓口となっており、ヤングケアラーの相談も受け付けている。

#### 【参考文献】

国分康孝(1992)『人間関係がラクになる心理学—悩みが消える、思いどおりの自分でいられる—』PHP文庫 p.90

国分康孝(1995)『自分をラクにする心理学—こだわりを生かし、幸せをつかむヒント—』PHP研究所 p.47

渋谷智子(2018)『ヤングケアラー—介護を担う子ども・若者の現実—』中公新書

中野信子(2020)『毒親—毒親育ちのあなたと毒親になりたくないあなたへ—』ポプラ社

林 伸一(2021)「アーサー・ビナードの翻訳絵本—『父さんがかえる日まで』論—」山口大学人文学部異文化交流研究施設発行『異文化研究』第15号、pp.12-31

林 伸一(2022)「アーサー・ビナードを囲む朗読+お話し会—コロナ禍の開催と図書館の運営について—」山口大学文学部発行『山口大学文学部会志』第72巻、pp.51-74

毎日新聞取材班著(2021)『ヤングケアラー—介護する子どもたち—』毎日新聞出版

村上靖彦著(2022)『「ヤングケアラー」とは誰か—家族を“気づかう”子どもたちの孤立—』朝日新聞出版

結城康博・米村美奈・黒川雅子著(2023)『自治体×福祉機関×教育機関×地域・ヤングケアラー支援者の役割と連携』ぎょうせい

## 【謝辞】

下松市笠戸公民館の廣中作次館長より、笠戸本浦地区の「人権教育活動講演会」の機会をあたえていただいたことに、まず感謝したい。そのお蔭で「ヤングケアラーの問題」を自分なりに再整理する機会となった。また講演会に同行し、絵本の朗読や紙芝居の実演に協力してくれた「山口の朗読屋さん」のメンバーの岡村久美子さん、島田令子さん、金崎清子さんに感謝したい。さらに他の「山口の朗読屋さん」のメンバーにも、本稿の草稿段階で読み合わせに協力していただき、貴重なアドバイスや意見、経験談などを聞かせていただいた。ここに深く感謝の意を示したい。

また、防府のYIC看護福祉専門学校と小郡の吉南准看護学院の学生には、授業の「ふりかえりシート」に率直な感想や意見を開示してもらうことで、本稿ができたといってもいい。この場を借りて、心よりの感謝の意を表したい。